神戸女子大学看護学部紀要　第８巻，45-52，2023年３月

◆委員会活動報告

第６回神戸女子大学看護セミナー報告

Report of 6th Kobe Women's University Nursing Seminar

魚里 明子[1)]，元木 絵美[1)]，槻木 直子[1)]
長井 友利子[1)]，西原 翼[1)]，吉田 陽子[1)]

Akiko Uozato，Emi Motoki，Naoko Tsukinoki，Yuriko Nagai，Tsubasa Nishihara，Yoko Yoshida

I. はじめに

神戸女子大学看護学部看護学科は，2015年４月の開学時からコミュニティ・オブ・プラクティス（Community of Practice：以下COP）の考え方を看護基礎教育に取り入れ，１年生から４年生で構成される小グループで学び合う「学びのグループゼミ」を，各学年，１単位の通年科目として配置している．加えて，毎年開催されている看護セミナーにおいでは，本学部科の特色であるこのCOPの学びを深めている．

この授業を受けた卒業生は，いま医療現場で看護職として何を考え，どのように活動しているのか．６回目となる今回の看護セミナーでは，COPの概念に精通した講師を招き，授業「学びのグループゼミ」を経験した４名の卒業生の語りから，看護職の成長にCOPがどのように影響しているのかを考えるセミナーとなったため，ここに報告する．

II. 看護セミナーについて

１．テーマ，方法

「コミュニティ・オブ・プラクティスは看護職をどう育むか」をテーマにパネルディスカッションが行われた．

２．開催日時

2022年２月23日（水）10：00～12：30
オンライン開催

３．内容

１）「コミュニティ・オブ・プラクティスの考え方をとり入れた授業『学びのグループゼミ』について」元木　絵美氏（神戸女子大学看護学部　講師）

神戸女子大学看護学部の基礎看護教育にCOPの考え方をとり入れた理由のひとつに，臨床現場で看護師に求められる実践力が高度化してきていることが挙げられる．看護師が行う判断や意思決定は常に状況に依存し，基礎教育においては深い知識や正確な技術を教えるだけでなく，それを状況に合わせて適切に使いこなせる人を育むよう求められている．Wengerら（2002）は，このような実践力を育むには，同じような状況に直面する人々と交流し，経験や体験を共有する機会が必要だと述べている．そこで神戸女子大学看護学部では，１年生から４年生までの各学年に，１単位の通年科目として，授業「学びのグループゼミ」を配置し，学生が同級生との横のつながりだけでなく，上級生や下級生という縦のつながりの中で学びを共有できるようにした．学習背景の異なる他者の経験に触れることを通して，看護の思考過程や実践に伴う判断の探究が促され，それぞれの学生が「私」はどのように患者に関わっていくのかという，看護師としてのアイデンティティが養われることを期待している．

「学びのグループゼミ」の授業方法は，各学年およそ10人ずつの40人で一つのグループを構成し，８つのグループで授業を行っている．授業は，前期４回，後期４回の通年８回，ゼミナール方式で開催している．授業「学びのグループゼミ」の到達目標は学年別に設定されており，例えば３年生の場合，学びのグループに参加し，他者に看護実践を表現すること，伝えることを通して，自己の学びを深め，看護専門職について考えることが目標となっている．学生の学びのグループへの参加の仕方は，コア・グループ，アクティブ・グループ，周辺グループ

1) 神戸女子大学看護学部看護学科
Kobe Women's University, Faculty of Nursing, Department of Nursing

という３つの度合いがあり，授業設計を行うコア・グループメンバー以外は，自由に参加していた．グループに４～５名配置されている教員は，異なる履修レベルにある学生の相互交流が効果的に行われるようにコアメンバーの相談役になるなど，学生の学び合いを活性化させる役割を担っている．

学生は，「学びのグループゼミ」へ参加することを通して，安心して学び合う場を創り出すことをしていた．そこでは，「存在価値を見出す」「経験を問い直す」などの相互作用が学生間に生じ，その結果グループの役に立てているという実感を得られたことで，さらに学びたいと動機付けられていく，つまり学生の学び合いが促進されていたことが明らかになった（元木ら，2002）．「学びのグループゼミ」のように，学生が共同参加することで学習が動機づけられるような仕掛けを設けることができれば，知識提供型の学習とは異なる学びが促進される可能性が示唆された．

「学びのグループゼミ」は，先述したような効果がある一方，授業時間の確保が難しいなど，準備や運営の課題がある．また，昨今のコロナ禍で遠隔授業となった時に，学生が同じ「場」を共有できないことによる影響をどう補うのかという課題が示された．

２）卒業生のインタビュー「臨床現場で私が大切にしていること」

「学びのグループゼミ」を履修した卒業生が，卒業後にどのような経験をし，どのようなことを感じ，考えながら活動しているのかを事前に聴き取った．各々の語りの要約を，以下に記載する．

(1)「患者が本当に伝えたいことを，聴く」　満田　柚香氏（2019 年卒 / 看護師）

臨床では，言語的コミュニケーションが難しい患者も含めて「傾聴」することを大切にしている．聴くときは，患者が本当に伝えたいことは何なのかを常に考えるようにしていて，患者から伝えてもらったことは本人に許可を取りながら他のスタッフと共有している．病棟全体で患者がどのような気持ちで過ごしているのか意見を出し合いながら，関わりを考えていくことを実践している．

大学での学びを振り返ると，傾聴することに焦点を当てた意見交換が多かったように思える．学びのグループゼミでは学年が違うメンバーでの意見交換だったため，お互いに自分の言いたいことを伝える難しさがあり，伝わるような話し方や言葉選びなど，相手のことを理解する姿勢は学んでいたと感じる．それが今，臨床で患者やその家族に関わる姿勢へとつながっている．

(2)「対象者の健康問題を，背景にある生活を踏まえて知っていく」伊藤　優氏（2019 年卒 / 保健師）

保健師として活動している中で，対象者の考え方や思いを知りたいという姿勢を常に持つことを大切にしている．例えば，「不安」では，今困っていることだけでなく，将来のことや環境のことなど，対象者の生活を知らないと本当の理解はできない．このように対象者を，生活している人と意識して関わるという姿勢は，学びのグループゼミで見出せた考え方の一つである．

また学びのグループゼミで下級生の意見や感想を聞いたときに，自分が１年生や２年生の感覚に戻れることを実感していた．学生を積み上げるにつれて知識を伝えることも大切ではあるが，上級生として教えるのではなく，同じ立場で話し合っていくと新しい気づきがあることを体験できたと思う．またそれは，今の保健師として対象者と関わるうえで，医療者としての立場だけでなく，同じ生活者として関わることにつながっていて，忘れてはいけないことだと思っている．

(3)「他者に伝える経験を積むことで，発信力が育まれる」　高本　晏季氏（2019 年卒 / 看護師）

学びのグループゼミでは，どうすれば他学年に自身の経験が伝わるかを考えながら発言していた．効果的に伝わるよう工夫した経験が，後輩指導やカンファレンスでの意見交換，患者との関わりで役立ったと感じる．卒後３年目で急性期の病棟から緩和ケア病棟に異動になり不安もあったが，他者と会話する力や発信力が身に付いていたことで，職場に馴染みやすいと感じる場面があった．これは，学びのグループゼミでコミュニケーション技術を訓練できた結果であると感じている．緩和ケア病棟では，患者からの正解がない問いかけに，どのように応えたらいいのかわからないという体験をした．先輩はどうしているのかを尋ねたりしながら，自分はどうできるのかを考えている．このように臨床では，看護師同士あるいは多職種に，患者の状況や自分の悩みを自分から発信していかなければならないことがある．学びのグループゼミで身に付けた力を活かしながら，今後も更にコミュニケーション技術を高めていきたいと考えている．

(4)「他者に伝えることを通して，自己の実践を振り返る」　前田　ありさ氏（2019年卒 / 看護師）

疾患の特徴で長期入院の患者が多いが，日々の関わりの中で，患者にとってプラスの変化に気づき，それを患者に伝えることを大切に実践している．自分が気づけることは限られているが，目に見えることだけではなく，検査データや薬剤などの変化，他スタッフからの情報や記録などからも見つけるようにしている．そのような関わりが患者にどのような影響を与えているのかなど，自分の行動を振り返ることや助言をもらうことも大切だと思っている．

学びのグループゼミで，実習経験を全学年で共有して，そこから学年関係なく意見をもらいながら，自分の実践のどういうところが良かったのか，他にどのような方法があるのかを考える機会があったので，今できているのではないかと思う．自分の実践を共有して多く意見をもらうことは自分の成長につながると感じている．

3）「看護職を育む方法としてのコミュニティ・オブ・プラクティスの可能性について」

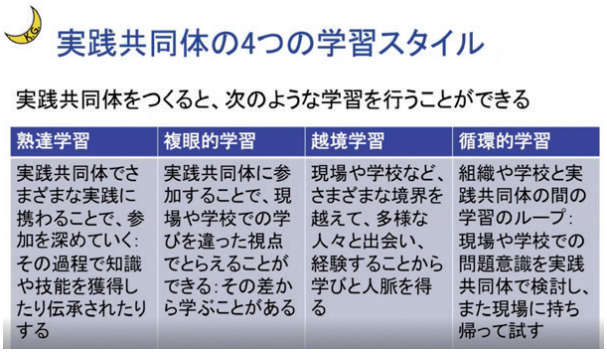
松本　雄一氏（関西学院大学商学部　教授）

関西学院大学商学部　松本雄一氏より，「看護職を育む方法としてのコミュニティ・オブ・プラクティスの可能性について」と題し，松本（2019）の内容を中心に講演があった．

実践共同体とは，「あるテーマに関する関心や問題，熱意などを共有し，その分野の知識や技能を持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団」であり，学習のためのコミュニティだと考えられる．この実践共同体には，様々な実践に携わることで，参加を深めその過程で知識や技能を獲得・伝承される「熟達学習」，実践共同体に参加することで，現場や学校での学びを違った視点で捉える「複眼的学習」，現場や学校など，様々な境界を越えて多様な人々と出会い経験することから学びと人脈を得る「越境学習」，現場や学校での問題意識を実践共同体で検討し，また現場に持ち帰って試す「循環的学習」の4つの学習スタイルがある．さらに，実践共同体は小規模で活動頻度の高い「熟達型」，比較的大きく活動頻度は低い「交流型」の2タイプを区別することとされ，それぞれのタイプに適した学習スタイルも異なるため，両者を使い分けること，そして組み合わせることが学習促進にとって重要なこととなる．

「技能伝承の促進」における実践共同体の事例研究によると，企業を超えて技能者が集まる場があることで，各企業に所属する技能者は「仲間がいた」という感覚を得られ，更に各技能者が実践共同体で得られた知識を企業で発揮することが出来ていた．更に，より大きな実践共同体に参加することで，人脈が広がって，さらに小さい実践共同体の学習が活発になっていた．

学びのグループゼミは実践共同体である．基礎看護教育のなかにこのような実践共同体を組み込むメリットは，本来なら失敗できないことを訓練することができるというところにある．看護職の実践は，患者の生命を左右する行為であるため，大きなやりがいにもなるが，気軽に失敗できない．学びのグループゼミは，強力な「代理学習」を促進する場となっている．また，現場の現実を知ることにより価値観が変容すること，患者との対話のレパートリーの獲得など，「聴ける・話せる・成長できる看護師」を育成する場となっている．



パネルディスカッションのスライドより
「実践共同体の4つの学習スタイル」

5．ディスカッション

玉木敦子氏(本学看護学部 / 教授)がコーディネーターを務め，松本雄一氏（関西学院大学商学部 / 教授），伊藤優氏（卒業生代表），元木絵美氏（本学看護学部 / 講師），野並葉子氏（本学看護学部 / 特任教授）が登壇し，看護職の成長にCOPの考え方をとり入れた授業「学びのグルーゼミ」で育まれた力などについて討議された．

1）「学びのグループゼミ」で育まれたもの

野並氏より卒業生の語りから，学びのグループゼミで身に付けた「聴く力」「チームを作る力」「つないでいく力」が臨床現場で発揮されていることがわかる，さらに臨床現場で成長し続けていることが実感できると述べられた．また，卒業生代表の伊藤氏より，対象者をより深く知るには，土地の風土や習慣，健康問題への対処法など，その人の生活を知ることが重要で，支援する場合に

はさらに，専門職種に「つないでいく力」が求められることが述べられた．ケアの対象者を生活する人として，支える考え方は「学びのグループゼミ」で話題となったテーマであったことを，保健師として活動しながら困ったときに思い出し，現在の活動に活かせていると実感できる．他にも，保健師グループで話し合いをするときに，学びのグループゼミで話し合ったことが思い起こされることがあり，それが松本氏の講演の中にあった「内面化された実践共同体」であると実感できたと語られた．

野並氏より，「看護の改革者として，チームや病棟の中，病院の中などいろんな形の繋がりや学びの場を作っていくことが出来る人になって欲しい」という思いから，学びのグループゼミの授業を組み入れたことが語られた．そのためには，発信力が必要となるので「学びのグループゼミ」という小さなグループ，安全な場で発信力をトレーニングしてほしいという考えが教員にはある．看護職は，ケアの質向上のために，病棟など現場で自分を守りながら看護職としての意見を発信しつつ，他の専門職とつながり，折り合っていける力が必要となる．本学看護学部では，そのための共同体を自ら作れるようにと考えて学生を送り出している．卒業生１人１人が，自身の経験を活かし，それぞれのコミュニティを発展させていくことを期待していると語られた．

２）看護実践力を育む仕組みについて

「学びのグループゼミ」は，「聴ける・話せる・成長できる看護師」を育成できる仕組みであることが松本氏より述べられ，仕組みが成功しているのは大きく分けて２つの要因があると示された．一つ目は「学びのグループ」でのディスカッションでは何を発言しても良いという心理的な安全が保障されていること，二つ目は，教員が学生の「学びのグループゼミ」への参加を見守ったり，刺激したりするなどして，コミュニティが活性化するように世話をしていることが挙げられた．

元木氏より，教員として「学びのグループゼミ」に参加するときには，学生と一緒になぜなんだろうと考えられる場，新たな気づきが得られる場であると，知識提供型の講義との違いを常に意識していることが語られた．また，野並氏より，学びのグループゼミで教員には，指導することではなく，学生が勇気をもって発言している姿に耳を傾け，時間を共有して成長を喜び，いつも見ていると示すという大きな役割があると述べられた．

松本氏より，伊藤氏が授業開始当初，「学びのグループゼミ」が何をする場なのかよくわからなかったが，コア・グループメンバーとして授業設計にかかわることを通して，学びのグループゼミで学び得ることは何なのか，後から気づくことができたという例を挙げ，この時教員が何をしていたのかを振り返ることが大切であると意見があった．教員は学生に，なぜこの授業で実習体験を話し合うことが大事なのか，わからなかったら自分達で考えていくように促すよう関わっており，そのように学生の意識を変えたり，価値観を考え直す機会を作っていたのではないかと述べられた．

最後に伊藤氏が在学生に向けて，「学びのグループゼミ」という学生と教員が同じように学び合う場があること，そこで得た学びを大事にしてほしいと語った．それは，大学で経験したことが今まさに現場で活かされていると実感しているからだと述べた．松本氏からは，学びのグループゼミは卒業生が成長し続けていけるしくみとして有用であること，この仕組みを経て学んだ学生は学び続けられる看護師としてブランド化されることが期待できると述べられた．最後に野並氏より，分からないことが恥ずかしいことではなく，分かったからこそ分からないことに気づくことができるようになる，現場で分からないことに気付けた卒業生は，大学院に戻るという形でコミュニティに還り，さらに看護を深めていって欲しいと思いが語られ，パネルディスカッションは終了した．

６．第６回神戸女子大学看護セミナーについてのアンケート調査結果

１）アンケート調査の目的と実施方法

第６回看護セミナーの評価と今後の実施に対する要望等を把握することを目的に，参加者を対象としたアンケート調査を行った．アンケートは，オンラインでURLを配信した．質問項目は，回答者の年代，職種，就業場所，本学の取り組み，実践報告と講演，パネルディスカッションの満足度，看護セミナーの開催時期と周知方法について，今回の看護セミナーについての意見や感想，今後の看護セミナーへの要望や希望するテーマについてである．満足度に関しては，５が「とても満足」，１が「不満足」の５段階評価とした．

２）アンケートの回収率と回答者の属性

アンケートは看護セミナー参加者86名全員へ配布し，回収は41名，回収率は47%であった．回答者の職種は，看護師18名(44%)，教員17名(42%)，助産師２名(5%)，

学生2名（5%），保健師1名（2%），その他1名（2%）であった．就業場所は，教育機関23名（56%），病院9名（22%），行政機関1名（2.5%），訪問看護ステーション1名（2.5%），その他7名（17%）であった（図1）．

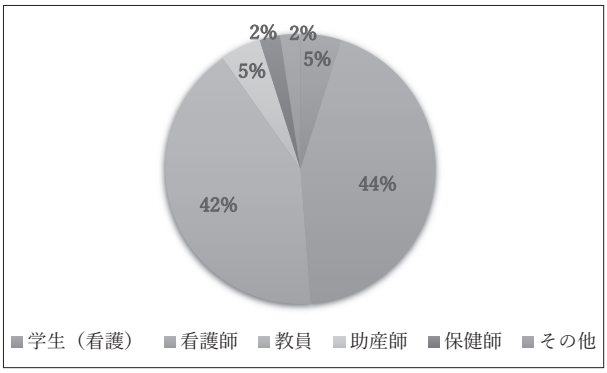


図1　参加者の属性

3）看護セミナーに対する満足度

(1)「コミュニティ・オブ・プラクティスの考え方を取り入れた授業『学びのグループゼミ』について」の満足度

「学びのグループゼミ」についての講演の満足度は,「とても満足した」が29名(71%),「満足した」が12名(29%)であった（図2）.「学びのグループゼミの実際を学ぶことができた」「学部生に対して行われている実際とOGからのインタビューで臨床にどう生かされているのか知ることができた」など，学びのグループゼミの取り組み方とその実際について理解への記述があった（表1）．また,「教育科目では分類できない，看護師の基礎能力の育成について改めて考える機会となった」など，基礎能力育成方法を検討するきっかけになったという意見もあった（表1）．

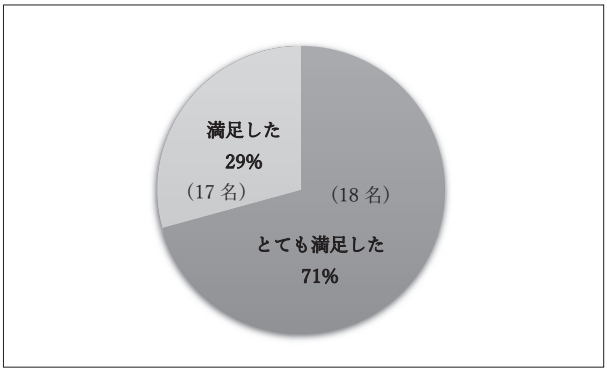


図2　講演「学びのグループゼミ」についての満足度

表1　講演「学びのグループゼミ」についての自由記載内容

学びのグループゼミの実際を学ぶことができた．
教育科目では分類できない，看護師の基礎能力の育成について改めて考える機会となった．
改めて，ゼミのコンセプトも理解できたし，実施しているゼミの効果を感じられたから．
授業で学んだ実践コミュニティの重要性，各グループによって引き出す力などを認識することができた．
学部生に対して行われている実際とOGからのインタビューで臨床にどう生かされているのか知ることができた．
卒業生の話を聞きすごく成長されているのだと思い，授業の良さがよくわかった．
どのように学びのグループが成長していくのかについて，イメージを共有することができた．
期待していた以上の充実感が伝わってきた．

(2)「臨床現場で私が大切にしていること」についての満足度

卒業生による「臨床現場で私が大切にしていること」についての満足度は,「とても満足した.」が29名(71%),「満足した.」が11名（27%），無回答が1名（2%）であった（図3）.「グループゼミによる成果がそれぞれの姿勢や態度に表れていることに驚いた.」「みなさんは簡単にあきらめる（仕事を辞める）という選択はせずに壁を乗り越えられる人材だと感じた.」と，卒業生に対するコメントや,「学び続けることができるための教育の仕掛けが大事なのだなと考えた.」といった，教育への気づきとなる意見もあった（表2）．

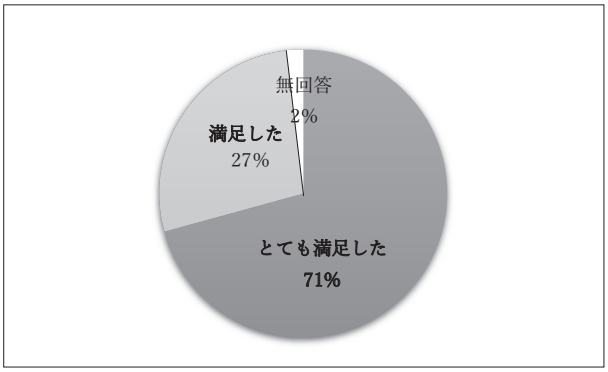


図3　「臨床現場で私が大切にしていること」についての満足度

表 2.「臨床現場で私が大切にしていること」についての自由記載

卒業生の方の真摯な口調と成長されている姿をみることは教育へのエネルギーになると感じた
グループゼミによる成果がそれぞれの姿勢や態度に表れていることに驚いた.
学び続けることができるための教育の仕掛けが大事なのだなと考えた.
学生時代の学びが臨床でどのように生かされているのか知ることが出来た.
みなさんは簡単にあきらめる（仕事を辞める）という選択はせずに壁を乗り越えられる人材だと感じた.
卒後 3 年目の看護師がどのような思いを持って看護をしているのかを知る機会となり，改めて自身の看護を考えるいい刺激になった.

表 3.「看護職を育む方法としてのコミュニティ・オブ・プラクティスの可能性」についての自由記載

様々な事例は看護とかけ離れているものではなく，身近に感じた．とても分かりやすかった.
松本先生のお話が分かりやすく，先生の雰囲気もとてもよかった．楽しかった.
事例としてお話を聞いたことが理論や他職種とのお話とつなげて考えることができた.
講師の先生のお話が大変うまくて引き込まれた．内容も今後の参考にできる気づきがたくさんあった.
様々な場での実践コミュニティについて知ることが出来，コミュニティ・オブ・プラクティスについて改めて考えることができた.
ビジネスの視点を含めることで，組織全体を巻き込こともできるのではないかというヒントが得られた.

(3)「看護職を育む方法としての COP の可能性」についての満足度

関西学院大学　松本氏による「看護職を育む方法としての COP の可能性について」の満足度は,「とても満足した」が 32 名（78%),「満足した」が 9 名（22%）であった（図 4).「様々な事例は看護とかけ離れているものではなく,身近に感じた．とても分かりやすかった」「様々な場での実践コミュニティについて知ることが出来，コミュニティ・オブ・プラクティスについて改めて考えることができた.」と，講演内容の理解に関する意見があった（表 3).

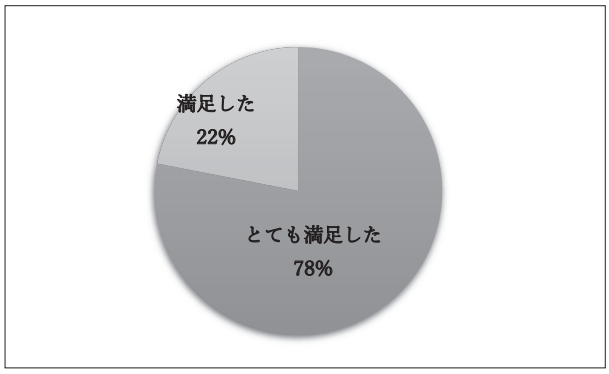


図 4　「看護職を育む方法としてのコミュニティ・オブ・プラクティスの可能性」についての満足度

(4) パネルディスカッションについての満足度

パネルディスカッションの満足度は,「とても満足した」が 27 名（66%),「満足した」が 14 名（22%）であった（図 5).「内面化する実践共同体や本学の COP のとらえなおしについてさらに理解が深まった」「発信していくことの力，共同体つくりで看護の質をあげていくこということの話をきき，現場での重要性を認識できた.」「今後の方向性が少し見えた気がした」といった,コミュニティ・オブ・プラクティスへの理解が深まった意見や,臨床の場における今後の示唆につながる意見があった（表 4)．また,「松本先生のご発言が中断したりと残念なところもあったが，それぞれの発言が絡んで楽しかった．もう少し時間が欲しかった位だ.」「オンラインでの開催にもかかわらず，型にはまらない意見のやり取りを伺えて，とても満足した」といった，運営に関する意見もあった（表 4).

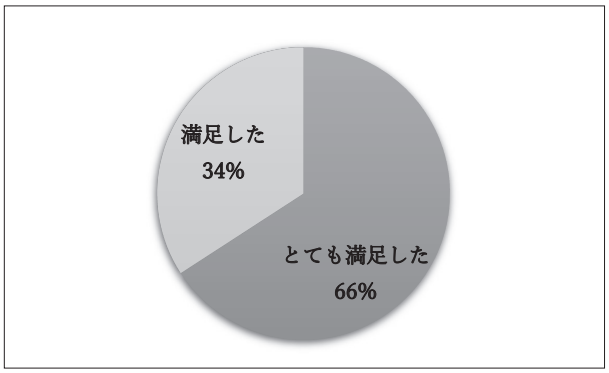


図 5　パネルディスカッションについての満足度

表4　パネルディスカッションについての満足度

今後の方向性が少し見えた気がした.
率直な意見交換を聞くことができた
内面化する実践共同体や本学のCOPのとらえなおしについてさらに理解が深まった.
発信していくことの力，共同体つくりで看護の質をあげていくこということの話をきき，現場での重要性を認識できた.
卒業生を交えてのパネルディスカッションはとても新鮮だった.
松本先生のご発言が中断したりと残念なところもあったが，それぞれの発言が絡んで楽しかった.
もう少し時間が欲しかった位だ.
オンラインでの開催にもかかわらず，型にはまらない意見のやり取りを伺えて，とても満足した.

(5) 看護セミナーの開催時期について

看護セミナーの開催時期については，「とても適当」が14名(34%),「どちらかといえば適当」が26名(63%),「どちらかといえば適当でない」が1名(3%)であった.

(6) 看護セミナーの周知について

看護セミナーを知った方法は「知り合いからの告知」が15名（36%），ポスター•チラシが13名（32%),「神戸女子大学のHP」が4名（10%),「その他（大学からの郵送物）」が7名(17%),「無回答」が2名(5%)であった.

4）第6回看護セミナーに対する意見や感想

14名（34%）の回答者が看護セミナーに対する意見や感想を記述していた.「学びの場をどう育んでいくのかを考える機会になり，臨床の場でできることをやっていきたいと思った」「卒業生がどのように授業に参加し，何を感じていたのか，今振り返って何を感じているのかなどを聞くことができて良かった．嬉しい気持ちと卒業生の成長に感動した.」「コミュニティ•オブ•プラクティスは臨床で活用できる手法であることを改めて感じた．また，実際にコミュニティ・オブ・プラクティスが行われている活動も思い浮かべることができた.」「実習で関わらせていただいた学生さんが立派に活躍されている姿を見ることができて，とても感動した．未来のリーダーたちに頼もしくあり，自分もボヤボヤしてはいけないと引き締まる思いでした.」といった，卒業生の姿に対する感想や，COPの活用についての意見が多く記されていた.

5）今後の看護セミナーへの要望や希望するテーマ

3名（7%）の回答者が今後の看護セミナーへの要望や希望するテーマを記述していた.「心理的安全性について」「ゼミに初めから先輩がいる学年になっていくと，また学びも変わって来るのか？そして今後，卒業生達がどのような中堅•熟達者になっていくのか,関心がある.」「看護職として，学生と教員が垣根を越えて交流できる機会になればうれしい.」といった意見があった.

6）アンケート結果のまとめ

今回の第6回看護セミナーは「コミュニティ・オブ・プラクティスは看護職をどう育むか」をテーマに開催した．パネリストによる講演通してコミュニティ・オブ・プラクティスの理解を深め，卒業生が語った内容からコミュニティ・オブ・プラクティスを実践と関連させて考えられるように企画した．セミナー参加者によるアンケート結果から，本セミナーが理論の理解や現場における理論の活用を促進するセミナーであったこと，コミュニティ・オブ・プラクティスが臨床で活用できる手法であることが示唆された．また，本セミナーの開催時期やテーマは，参加者のニーズに合っていたと評価する．今年度はコロナ禍第6波の影響により，例年よりも医療機関からの参加者が少なく，教員の参加者が多かったが，参加者の満足度も高く，看護基礎教育，臨床現場のニーズに沿った内容であったと考える．しかし，本学部学生の参加者が少なく，学生の参加をどう促していくかが今後の検討課題である．また，今年度はコロナ禍によりオンライン開催を行ったが，インターネット通信が途中で途切れた場面もあり，オンライン開催の場合は主催者，参加者側がインターネット環境をどのように整えていくかも課題である.

今回は，先輩のいない1期生として卒業した卒業生のインタビューであったが,「ゼミに初めから先輩がいる学年になっていくと，また学びも変わって来るのか？そして今後，卒業生達がどのような中堅・熟達者になっていくのか，関心がある.」という意見や,「心理的安全性について」といったテーマを希望する意見があった．大学が開催する看護セミナーのテーマには，現場のニーズにマッチし，大学と病院を繋ぎ，理論と実践を繋ぐものが求められている．アンケートのコメントを参考に，今後の看護セミナーのテーマを検討していきたい.

Ⅲ．おわりに

第6回看護セミナーでは，COPを取り入れた教育の成果として，在学中に育まれた実践共同体が卒業後も内面化されて別の場所での学びに活かされているという大きな発見があった．今後もCOPについて学びを深め，教育や臨床の現場，研究に取り入れ発展させていきたい．

引用参考文献

元木絵美，小路浩子，丸山有希，鷲田幸一，玉木敦子，野並葉子，福山敦子，西方弥生（2020）．看護基礎教育にコミュニティ・オブ･プラクティスの考えを採り入れた「学びのグループゼミ」での学生の学び，神戸女子大学看護学部紀要，5, 11-22.

Etienne Wenger, Richard McDermott, William M .Snyder（2002）/ 野村恭彦監修（2010），コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践，翔泳社．

松本雄一（2019）．実践共同体の学習，白桃書房.